

すぎなみ大人塾

講演「思いが生んだ介護靴」

(有)フェアベリッシュ代表取締役

伊藤 弘美 さん

日時：2005年11月30日(水)

会場：セッション杉並 視聴覚室

【プロフィール】

- ・12年間の家族の介護体験を元に、日本で初めてリハビリ介護靴の商標を得る靴を発案・製作。2002年に(有)フェアベリッシュを起業した。
- ・高校卒業後、武蔵野音楽大学に進学するも、家業が傾き、家族の介護も重なり中退。家業を継ぎ介護に渾身こめるが、その甲斐もなく6年後、母親が死去。その2年後には祖母も死去。おばあちゃん子だった彼女は、お散歩をしたがっていた祖母の夢を叶えようと、その3か月後、祖母のために介護靴を作り始める。翌年には大手メーカー・月星化成の協力も得て完成。
- ・2003年国際福祉機器展にて「こんな靴が欲しかった」と評判を呼び、翌年の2004年5月1日お散歩に行きたがっていた祖母への思いを込め、“青空”という意味から命名した「フェアベリッシュ」が2年の歳月を経て発売スタート。

会社を起業したのは、ちょうど3年前。1年半前から介護靴を販売していますが、実は、起業しようと思って起業したわけではありません。こういうのがしたい、こういうものを作りたい、こういうものをあの人に届けたい。そういう思いから始まりました。今日は、その過程を「夢を描く」というテーマでお話させていただきます。

まず、会社の案内から始めさせていただきます。弊社は「フェアベリッシュ」という名前です。“フェア”は英語で“快晴”、“汚れのない”という意味です。“ベリッシュ”は、この介護靴がベリッとかがして、シュッと回すと、パカッと開くので、この靴を履くことで、今まで靴を履いて外出できなかった人でも、散歩に出かけることができる。介護・闘病生活の中、1日1度でもいいから真っ青に晴れ渡った青空を思い出して欲しい、お洒落を楽しんで欲しいという願いを込めて付けたものです。

会社は港区の三田、インキュベーションセンターという、中小企業庁から紹介されたところに入居し

ています。設立は3年前の12月27日。設立当初、資本金は300万円、従業員も私とパートナーの立った2人で始めましたが、現在では資本金は2500万円、従業員は現在11名になりました。

事業内容は、この介護靴を作ることがきっかけで起業しましたので、介護用品などの研究開発から製造、販売まで展開しております。その他に、インターネットを利用した介護のある生活を彩る便利な商品の企画・販売も行っています。また、今年からは、障害者の方のためのウェディング業界のプロデュースや、ウォーキングのイベントなど、福祉の街づくりに関わるイベントも行っていくことにしています。

さて、この介護靴を作るまでには、非常に大変な苦労がありました。この靴は、靴が履けなくて、自由に歩けなかった人のための靴、いわば「歩けない方のための靴」として発案したものです。しかし、靴というのは、本来は、歩くためのアイテムなので、このような靴は、JIS規格に適應されず、これまで商品化されることは難しいとされました。そこで私は考えました。たとえば車椅子を利用している方にも、足を保護するためには靴が必要です。服装と合わせるためにも、ファッションアイテムとしても必要です。そこで、リハビリ介護靴として、日本で初めての商品分類に加えるということで、製品化への適應、また初のリハビリ介護靴としての認定を受けることができたのです。また、日本での特許取得だけでなく、海外11か国で特許の申請中です。

この靴の最大の特徴は、ご覧のように、靴の周りがファスナーで囲まれており、パカッと簡単に開くことができることです。しかし、ただ、簡単に開くというだけでなく、足に障害のある方、これからリハビリして歩こうと頑張っている人の足を支えるものなので、人間工学に基づいて、安定歩行ができるように作られています。また、障害を持っておられる方は、ものをこぼしたり、粗相することも少なくありませんので、靴が汚れても、丸洗いができるというのは喜ばれる点なのです。そして、立った状態でも、寝たままで、足を乗せるだけで、簡単に履くことができます。

この靴の開発に至った経緯をお話ししましょう。母と祖母の介護に明け暮れていた頃から、この靴作りは始まりました。最初は車椅子の助けは必要とするものの、何とか生活できていたのですが、薬の副作用で足がむくんで靴が履けなくなる、靴を履くだけで足の指が折れるというような状態に陥りました。そんな祖母や母のために、履ける靴を作ってあげたい、というのが動機でした。

今から14年前。子どもの頃からの夢だった音楽家を目指して勉強していました。兄は建築家になるために大学に通っていました。私たち二人を支えてくれたのは、写真の現像所を営んでいた母と祖母です。その母が急に倒れ、精密検査の結果、先天性脳血管奇形と診断されました。すぐに手術を受け、手術は成功し、退院後の看病には祖母があたることになりました。そこで現像所の仕事は大学生の兄と高校生の私がやることになり、何とか生活を支えるよう頑張りました。そして1年後、今度は、母の看病をしていた祖母が倒れてしまいます。入退院を繰り返す母と祖母の介護をしながら、兄と現像所の仕事をこなし、その合間に学校とレッスンに通いました。そして武蔵野音楽大学に無事合格することができました。しかし、現像所の経営は悪化の一途をたどっていきました。

そんな中、私はある決断をしました。音楽家の道を諦め家業を建て直すことにしたのです。兄も大学を中退し、二人力を合わせて会社の再建に取り組みましたが、おりからの不況で、5年後にはあえなく倒産してしまいました。母や祖母の入院費に加え、多額の借金だけが残りました。さらに、祖母が急性肺炎で意識不明の重体になってしまいます。意識が戻っても、植物人間になるかもしれない、医師から

はそう告げられました。そんな状況を見かねて、母は再手術を受けると言い出しました。しかし、咳をただけで肋骨にヒビが入るような状態で、手術に耐えられるとは思えませんでした。2000年5月、母は手術を受けます。成功したかに思われたのですが、術後の経過が悪く亡くなってしまいます。そんな母の思いが届いたでしょうか、1か月以上も意識不明だった祖母の意識が回復したのです。そして、祖母のリハビリが始まりました。ある日、祖母は散歩に行きたいと言いました。でもスリッパやサンダルを履くことはできましたが、歩くと転ぶ心配がありました。さらに、靴を履かせることは簡単ではありませんでした。このとき、世界中のお年寄りや体の不自由な人も同じ思いをしているのではないかと。靴を履くことができず、散歩にも行けない不自由さを味わっているのに違いない。何とか解決できないものか。そして、祖母は、散歩に行きたいというささやかな願いも叶わず、それから2年後に亡くなってしまいます。

祖母が亡くなって3か月ごろのことでしょうか、祖母を一度もお散歩に連れて行ってあげられなかった後悔の思いからか、私は不思議な夢を見ました。それは今まで見たこともないような靴、ただ足を乗せるだけで履くことのできる靴の夢でした。祖母が、その靴を履いて楽しそうに車椅子で散歩に出かけていくのです。私はこのとき、「おばあちゃんが果たせなかった願いを、形にしなければいけない」と強く思ったのです。その夢の中の靴は、甲の部分がファスナーになっていて甲全面がパカッと開き、足を乗せるだけで簡単に靴を履くことができるというなんとユニークな形状でした。

夢から覚めた私は、その靴の絵を一心不乱に描き続けていました。何とか、夢で見た、あの靴を作って祖母の墓に供えたい、ただそれだけの思いでした。でも、まったくの素人の私には、何をどうすればいいのか、まったく見当もつきませんでした。その時、思い浮かんだのが、鶯の大將をしている幼なじみの「君」でした。彼はアパレルデザイナーでもあったのです。彼のところへ、その絵を持ち込んで相談しました。アパレルと靴では全く違う世界ですが、そんなことにも考えが及ばず、彼の仕事場の一角を占領して、彼の協力を得て試作第一号を完成させました。

なぜ、彼だったのだったのか。祖母が亡くなるまで、高校一年生から12年間、家族の介護を続けていたこと。母が経営していた会社が倒産し、相続税も払えず家を手放すところまで追い込まれましたが、84歳になる祖父がおり、家を出ることはできません。そんな私を友人たちは遠くから見守ってくれました。20歳くらいの年頃といえば、恋人ができた、友だちと旅行を楽しんだりする年頃でしょう。でも、友だちから食事に誘われてもつき合うことができません。お金がないから旅行にも行けません。そんな私を誘うのは可哀想だと思った友人は、食事や旅行に誘うことはありませんでしたが、メールなどでのつき合いは続いており、それが私の励みになっていました。

幼なじみの「君」は建設会社のお家の息子さんです。建築会社は多く記録写真を撮りますので、現像所のうちとは昔から付き合いがあり、毎日のように私が写真を彼の家へ届けていたのです。家族ぐるみの付き合いがあり、母や祖母の葬儀の際には、家族総出でお手伝いをしてくれるような関係です。そんなわけで、私が唯一付き合いのある相手です。夢の中で見た靴の話ができるのは、「君」と兄しかいませんでした。しかも、アパレルのデザイナーでもあります。洋服と靴はともに身に付けるものだから、同じように考えていたのです。ですから、洋服のデザインができるのなら靴もできると単純に考えて、夢を見た翌日の夜には彼の仕事場に行ったのです。ところが洋服と靴は全くの別物、ということで彼に断れてしまいます。思わず私は、「君」にしか話せないと思って訪ねたのに、「君」でもダメなのか」とため息をもらいました。すると、鶯の大將でもあり、気の強い彼はケンカを売られたと思ったのか、それ

ならもう一度話を聞こうじゃないか、ということになりました。そこでこれまでの経緯を詳しく話しましたところ、それなら誰かに頼むのではなく、自分で作って祖母の墓に持ってゆくべきだとアドバイスしてくれました。また、協力は惜しまない、とも。

私がイメージしていたのは、固い革靴ではなく、柔らかい素材で作られていて、優しく足を包んであげる、そんな靴です。でも、それを実現するには、それなり技術を持ったメーカーしかありません。その靴を持って、生産してくれそうなところを片っ端から当たることにしました。でも、相手にしてくれるところはありません。個人でやっているから相手にされないのか、そう考えて、母の生命保険 300 万円をつぎ込んで有限会社を立ち上げました。そして、靴製造の大手である月星化成にアタックし、アポイントをとることができました。実は、月星化成とアポイントを取ることにこぎつけた 12 月半ば、まだ法人化はされていませんでした。電話で係りの人と話をした際、最後に、「もちろん、おたくは法人さんですよ」と聞かれました。私は思わず「もちろんそうです」と答えてしまい、年明け早々のプレゼンテーションに間に合わせようと、知り合いのツテを頼りに、あちこちかけずり回って、ようやく 12 月 27 日に法人設立に至ったという裏話があります。ただ、靴の特許申請や商標登録などは、他の会社に迷惑をかけてはいけなないと考え法人化の前に済ませていました。

ところで、私にはプレゼンテーションのノウハウがまったくありません。そこで、そもそも声楽家志望だった私は「とにかく伝える声が大切だ」と思い、発声練習から始めて懸命に声を出し、説明をする練習をしました。そしていよいよプレゼンテーションの当日、意を決して月星化成にお伺いし、介護靴の必要性を熱心に語りかけました。しかし、相手は靴作りのプロたち、次々と鋭い意見が出ました。周りをファスナーにすると靴の強度が落ち、事故につながる危険性が高まる、など、考えてみれば、ごく全うな指摘でした。意気消沈しました。これでは、他のメーカーにあたって結果は同じだろうと思われました。ところが、数日後、その月星化成から電話が入り、「足の不自由な方に本当に必要な靴だと思うから、製造を挑戦してみましよう！」と言ってきてくれたのです。力を入れなくても簡単にファスナーが開けられ、しかも靴として頑丈で、なおかつ柔らかい構造であること。そんな難しい条件に、月星の靴作りのプロの方たちが取り組んでくれました。月星は、日本で初めてゴム底の靴を製造した会社だけに、技術もプライドもノウハウもあります。研究熱心でもあり、介護靴と聞いて、真剣に取り組む姿勢をみせてくれました。安心安全で、確かな品質の靴を作ってくれるのは、月星しかない私は確信しました。実は、他のメーカーの靴も OEM で月星が生産しているという話を聞きました。日本で販売されている靴の 8 割近くは月星が生産していると言われています。

私は、ただ、履くことができるだけではなく、屈曲力と反発性があり、歩くことを応援する柔らかい靴を望んでいました。ゴム底靴の確かな技術を持っている月星は、そういう意味でも願ってもないパートナーでした。

そして、2004 年秋、東京ビックサイトで開催された「国際福祉機器展」で発表され、来場した人たちのアンケートでは、99.8%の人たちから、素晴らしいという評価を得ることもできました。取り扱い店舗もあつという間に増え、初回生産分 1200 足は 1 か月で完売してしまい、ご迷惑をおかけしてしまったこともありました。この商品は、大切な足を守るという強い思いがあるため、一足一足が完全な「職人さんの手作り」です。この靴を作るのに、およそ 40 人の職人さん達が U の字になって一足一足大切に作っています。

また、その試作品を持って、ボランティアでお付き合いのある障がい者施設へ行き、そこである男性に、どこで靴を購入しているのか尋ねました。すると、彼は、「そんなこと知らない」と言います。

とぼけているのかと思ったのですが、彼はサンダルしか履いたことがなかったのです。子どもの頃から小児麻痺で足が変形しており、靴とはずっと無縁の生活だったのです。足の甲がくの字になっており、麻痺があるので足首を曲げることもできない。さらにずっと寝ている生活なのでむくみもありました。だから、どんな靴を買ってみても履くことはできない。「靴を履くことは、ぼくにとって一生のあこがれ」だと言いました、「お祖母さんにその靴を届けることが出来たら、僕にもその靴を届けて。」と涙を流されたのです。彼の想いを知り、その時初めて祖母一人に向かっていた気持ちが、彼を含め、もっと多くの人にも夢で見た靴を届けたいと思ったのです。また、障がい者センターの他の人たちの多くも、やはり靴を履いたことがなかったことに気が付きました。

後で振り返ってみて、気が付いたのですが、夢を実現させるためには、大切なプロセスがあると思います。100の失敗は、100のダメだし。ダメだしされたものを1つ1つ確実にクリアしていく根気強さと、それを支える熱い思いが、夢を1歩ずつ実現させていく歩みになると思うのです。

たとえば、何のあてもなく、靴の試作品を作ってくれそうなメーカーを探すとき、「君と話し合っと思いついたのは、服と靴との共通点。靴にも服にもタグがついています。そこで一番最初に訪ねたのは、靴メーカーではなく、タグ屋さんでした。今から考えると冷や汗ものですが、その時対応してくださった、タグ屋の部長さんは、「うちはタグ屋だから靴のことは分からない。でも、靴メーカーに当たる前に、名前(商標)がないと、どこも相手にしてくれないよ」とアドバイスしてくれました。当時の私は、商標のないものは作れない、そんなことも知らなかったわけです。続けて、商標登録に行くと、そこで、「こういうものは、今まで見たことがない。特許は申請してあるのですか?」と聞かれ、いいえと答えると、「困りますよ、これを作って、うちが権利侵害で訴えられたらどうするのです!」と言われ、あわてて特許庁に行って調べる といった調子です。さらに、特許の申請の際に「これは国内で作るとコストがかかるが、中国など海外でも特許申請はしているのか。特許の申請をしていないと海外では生産できないよ」と教えられ、世界11か国で特許の申請をすることになったのです。

このように、さまざまな人たちから“ダメだし”をされ、それに対応するという形でやっていたので、会社設立の前に、準備はすべて揃っていたというわけです。そういった下準備が整っていたからこそ、月星からの誘いに乗れたわけですし、普通では考えられない早さで靴の生産が実現したのだといえます。また、多くのメーカーから断られはしましたが、その度に、何が足りないのかに気づかされたことも多々あります。

区の職員や官僚の方たちにも大変お世話になりました。私は学生時代から介護中心の生活を送ってきましたので、社会人としての経験がほとんどありません。ビジネスというものに縁遠い存在でした。相談相手もいません。会社を設立しようと訪れた銀行で子ども扱いされて断られ、当時住んでいた目黒区の区役所に相談に行きました。区の職員は困惑し、区で対応できることではないので、経済産業省へ行くように言われました。さらにそこで話をすると、中小企業庁を紹介されました。「たらいまわしだ。」と思いましたが、しかし、お役所の人たちは、お金がない、人脈もない、相談相手もない、そういう人間にもとても親切に耳を傾けてくださり、また、お役所の一窓口として、各制度などについて懇切丁寧に教えてもいただきました。そして、靴を生産するための助成金を受けることもできました。そうすると、今度は銀行の方から、融資をしましょうかと言ってくるようになり、銀行とのつきあいも始まりました。このように世間一般とは逆の流れで会社を設立したわけです。

この講座の受講者の中には、起業を考えておられる方も多いと思いますが、考えをまとめ、中小企業庁をお訪ねになることをお勧めします。また、その際、プレゼンテーションが不可欠ですので、それも

練習しておかれることも宜しいかと思えます。中小企業庁の創業支援課では、プレゼンテーションを義務づけています。なぜなら、同庁では、商売は人と会って話ができないと成立しないのではないかと考えているからです。プレゼンテーション能力のない会社は、いくら資金援助をしても育たない可能性があるのではないかとの見方かもしれません。審査では、結構いじわるな質問もされますが、やりたいことが明確になっていれば、後は熱意を込めて語りかければよいと思えます。そうすれば、おのずと道は開けるでしょう。良いもの、また新しいものをつくるには、開発費用がかかります。しかし、起業当初、そのような開発費がある方はそういらっしやらないと思えます。しかし、その事業が社会的に貢献できる可能性があると思込んで頂ければ、助成金をはじめ、国から様々な支援が認められます。良いもの、良い事業の基盤をしっかりと形成する為にも、国の支援は多いに活用すべきだと、私の経験では思えます。商品の開発だけでなく、商店街の活性化などにも、国の支援はあります。そういったものを活用して自分の住んでいる地域を活性化できることは幸せなこと、国にとっても良いことだと思います。

私個人の願いから始まった、このプロジェクトが、ここまで大きくなったのは、このように多くの人たちの協力があったことを忘れることはできません。